

本マップは令和7年度元氣な十和田市づくり市民活動支援事業に採択された「十和田を世に知らしめた大町桂月没後100年記念事業」の一環として作成しました。

大町桂月を語る会 令和7年8月30日発行 第1版

十和田湖 奥入瀬溪流 鳶 4～11日目

※番号は訪問順、囲みの色は日毎同色です。(全図共通)

46 【10日目:明治41年9月4日】
松見の滝

松見の滝は黄瀬の滝ともいう。山は岩肌を露わにし上は裂けて鉄のようだ。その合するところから一川の水がすべてまとまってまっすぐに流れ落ちている。およそ約60m、下はまた約15～18mほどの岩を敷(おお)って流れ落ちる。二つの裂けた岩の山には姫小松。後ろを見れば巨岩が天を衝いてその頂にも姫小松。このあたりの山に松はない。ただここだけにあるので松見の滝だという。岩質は玄武岩、約90mの滝といっただけで山水に親しむ者には飛び立つ思いがする。午後7時15分、鳶温泉に到着。昼食に30分、湯つばに10分休憩して正味8時間半は少しも休まず歩き通した。歩いた距離はわずかに往復約16kmだった。鳶温泉泊

35 【8日目:明治41年9月2日】
御鼻部山

およそ3km、岸を離れて山に登る。牧牛の歩いているところは歩きやすかった。路がなく山全体に老樹が茂る。8割はブナ。登るにしたがって地竹が密生。雨降る。気の集にたまった水が落ち、水の中を歩くようだった。ようやく頂上。霧のため眺望なし。冷気が骨に達した。雨に濡れていない枯竹を燃やすと濡れた枯木、枯竹も燃えた。船夫が地竹を4本切ってきた。1枚にしてはどうかという。根元の直径は約21cmほどもある。思いう数百年の歳月を経た竹。1時間も火に当たる。日が暮れないうちに出発。船夫がいなくなった。青森、秋田二県の界として約18mごとに小さな木の標(しるし)があった。ようやく一つの標を見つけては次の標の方角を考えて次の標を見つけ、また次の標を見つけた。眺望が見えなかったが、十和田湖を見下ろすところを御鼻部山と決めたことは間違いないと確信した。宇樽部三浦氏宅泊

13 【6日目:明治41年8月31日】
中湖 御倉半島、御倉山

船で宇樽部を出発。春汀は持病の痔の静養のため宇樽部に残る。旧知の三浦泉八氏との話も横もっていることだろう。御倉山の端をめくり、中湖に入り、次第に御倉半島の断崖を見上げる。中湖の東岸、断崖が垂直に立ち、崖は高く、水深もあり、水は清い。両手で抱えるほどの石を崖から崩して湖に落としのそき込んでみると魚のようにひらひらと泳ぎ、鯛大となり、金魚大となり、ついに見えなくなった。船夫がいうには、十和田湖中でこの中湖が最も深く、かつて100尋(約150m)ほどの縄をおりしたが水底に届くことができなかった。地理学者の説によると、十和田湖全体は陥没によって生じたがこの中湖は噴火口である。

18 【6日目:明治41年8月31日】
赤根崎

赤根崎より先は断崖が赤色を主として、いろいろな色がかかり、数キロも長く南に延びて一大長虹のようだった。

20 【6日目:明治41年8月31日】
千丈幕

千丈の断崖西北より起こり、南をめくって東にいたり、御倉山を取り囲み、長さは約2.6～2.7km。このような景色は見たことがない。「千丈幕と名付けてはどうか」といって、「よし」という。百聞難ならほかに多くあるが、千丈幕は御倉山の特徴で十和田湖の一特色。この一大断崖のために人は陸地からこの山に登ることができない。山全体に樹が茂り、十和田湖畔で猿はただこの山だけに住むという。晩秋の木の実が熟す頃、猿の群れが月夜に叫ぶという。

14 【6日目:明治41年8月31日】
日暮崎

日暮崎をはじめとして崖の突出しているところが多い。崎というよりむしろ岩といふのが合う。いずれも巨岩でしかもみな姫小松が生えている。

23 【6日目:明治41年8月31日】
中山半島

中湖の南岸に名勝地はない。西岸は前日見学。東岸に比べると水は浅く断崖も千丈幕と比べると引けを取る。すぐに最北端の岩にこぎつけて、皆ここにある。休屋の万々による宴會が開かれた。主人側は織田與次郎(おだよしろう)氏、中村善吉氏、鈴木尚徳氏、川村松五郎氏、栗山政治氏の諸氏。ここを中山崎といい、半島全体を小中山といい、中湖と西湖とを隔てる小連峰である。

25 【6日目:明治41年8月31日】
西湖 東岸

西湖に入り東岸に船を進める。急にどごとと水に入っしたのは神主の織田氏で、良くないことを始める。われらも言わなくてはならぬだろうと続いて水に入る。三浦道太郎氏も入る。その他数人泳ぐ。西湖の東岸は、中湖の東の岸のように深くはない。崎には六方石が並ぶところもある。

24 【6日目:明治41年8月31日】
中湖

宴が終わり、一同は休屋の船に乗り、中湖と別れた。中湖は一理四方。北は湖心に連なり、東、西、南の三方は断崖と青々と茂った樹に囲まれた別天地中の別天地である。

27 【6日目:明治41年8月31日】
自龍岩

船から降りて、自龍岩(じごりいわ)に向かう。数十丈の孤岩の上にあり、三度鉄の梯子を登る。ほとんど天に昇るような思いだった。妙義山の犬岩、旭岳にも、この景観はない。そして、ここには湖もある。

26 【6日目:明治41年8月31日】
西湖 柴夷島、蓬萊島(ほうらいじま)、種が島、鯉島、甲島、恵比須島(えびすじま)

島が多い。くみ島、蓬萊島、種が島、鯉島、甲島、恵比須島、みな、岩、どれも姫小松が生えている。松島には樹があるがこの樹はなく、牡鹿半島には岩があるがこの岩はない。十和田湖は天下の風光を思いのままにしている。

29 【7日目:明治41年9月1日】
追手(現在の生田) 和井内貞行の彫化場

三浦一族の少年二人(小平四郎氏、三浦一雄氏)が宇樽部からくる。織田宅を辞す。船で生田に着く。和井内貞行の彫化場を見る。和井内氏は、カバチンボという北海道の鰐を取り寄せて、ここで養殖して数年、和井内鰐の名前が付けられている。本土でこの鰐がいたのはここだけ。その功勞により緑綬褒章を賜っている。多謝、和井内氏の賜物である。

28 【6日目:明治41年8月31日】
休屋 織田與次郎氏宅

夕方、織田氏宅に到着。江渡省三氏、島谷部良太氏、小平四郎氏、三浦一雄氏の4氏は宇樽部歩いて帰る。三浦道太郎氏、松原寅次郎氏、百穂、桂月は織田氏宅に泊まる。夜に宴が開かれる。宴が盛り上がり外に歌声が起き、数十人が久くになって踊りかきつ歌う。これは村民一同が盆踊りをして、われらの旅に(きょう)を添えてくれた。休屋 織田與次郎氏宅泊

11 【5日目:明治41年8月30日】
休屋 織田與次郎の家兼宿、十和田神社、南相坊・八郎太郎の祠 御占所、中湖、御倉山、鯉島岩、大黒岩、天の岩戸 金の神、山の神、火の神、風の神、西湖の濱、恵比須島

道太郎の子の三浦一雄、いとこの小平四郎も新たに加入。ともに少年の学生。宇樽部から休屋まではおよそ4km。休屋の鈴木尚徳、中村秀吉、川村藤吾郎。男女の生徒が思いがけず道で出迎え。好意は細い道にも表れていて最近草を刈った跡が見えた。休屋は、十和田湖諸部派の中心地也。織田與次郎(十和田神社の祠官)の家に着く。織田氏は、祠官にして宿屋も兼ねる。酒肴で款待される。十和田湖畔の杉はただこのみ、並木が長く続く。十和田神社に詣でる。日本武尊を祭る。険しい岩山を登ると崖に南相坊・八郎太郎の祠(ほくら)がある。約16mほどの鉄の梯子を下りて、古い場に着く。中湖、御倉山を見る。学生が4人船にいた。五戸から春汀、桂月らを慕い十和田湖にきていた。一行もこの船に乗って出発。中湖の西岸断崖を見上げ、水中に孤立する鯉島岩あたりで船を返した。十和田祠前から別路を取り、大黒岩、天の岩戸、金の神、山の神、火の神、風の神などの岩窟を見て、西湖の浜に出る。恵比須島を見て帰途につき、織田氏宅で小憩。三浦氏宅泊

47 【11日目:明治41年9月5日】
鳶温泉 湯沼(鳶沼)

早朝、鳶沼に行く。くりぬき船、棹があったので棹を借りる。水は澄み、底は粘土らしく棹をさしても濁らない。鯉、金魚が泳ぐ。林山が四面を囲み鳥が鳴く。広さ7ha(現在は6haと確認されている)。温泉もあり、神仙の苑もある。ただ不便なところにあるために世に知る人が少ない。百穂、桂月は三本木へ出発。小笠原耕一氏の父、小笠原幸七氏、叔父善吉氏が門で見送る。子ども小笠原新吾氏は東北学院の学生。同行する。「山の神」太田吉司氏も同行。一人の男が一行の荷物を背負って同行。※一行 桂月、百穂、小笠原新吾氏、太田吉司氏、男

45 【10日目:明治41年9月4日】
御所河原(ごしよがわら)

小石の洲があり、水が左右に分かれる。御所河原という、面白い名前である。休憩して酒と少しの食事。一瓶酒が余る。滝つぼまでもついでこうと提案すると滝を見るのに酒はいらぬと太田氏。自分は風流をわかっていたつもりだったがまだまだだと思った。荷物はここにおいてまた登り始めた。

44 【10日目:明治41年9月4日】
鍋倉(なべくら)の瀑

ここから、太田吉司氏がいうように、40回黄瀬川を渡渉する。左の岸に滝が多い。その中の鍋倉の滝は、はじめ約6mは激しい流れ。すると噴水のように斜めに飛び上がる。約9mばかりで岸壁にあたり15～18mほどの崖を激しく下り落ちる。玄人受けする珍しい滝である。

43 【10日目:明治41年9月4日】
黄瀬川

明けると雨。松見の滝へは深流を渡ることを40回。増水したら行くことができない。10時。太田吉司氏「この程度の雨なら行くことができる。雨をつく元気はあるか」「大いにあり」と答える。百穂、真綿を背中に入れ綿入れを着る。頭には「ばおり」、足には「はばき」、[裏(み)の]を着る。先頭・太田吉司氏・百穂・桂月・後ろに護衛の男路なき山を幾度か下下して黄瀬川の深流に出るまでに1時間半かかった。

42 【9日目:明治41年9月3日】
鳶温泉

鳶川の左岸を上ること2kmほどで通天橋を渡り、2kmほどで鳶温泉に至る。鳶温泉に着いたのは午後8時。(※一行 百穂、桂月、三浦道太郎氏、一雄氏父子、4人 および、荷物運搬の男1人 計5人)春汀たちはすでにいらず。江渡省三氏一人待っていた。法興沢村長小笠原耕一氏も来て酒肴にて歓迎。鳶温泉は、小笠原耕一氏と小笠原直吉氏が経営。この頃家を増築して道を昔調にして三本木から人力車が通るようにした。泉質は塩類泉。太田吉司氏は、体格強壯無比で健脚。このあたりの山は歩きつくしている。数日の食料を持ち、一人で山に行くことも多い。「山の神」と言われている。路のない険しい山を1日約20kmくらい歩ける。太田氏「この辺りは滝が多い。見ごたえのある滝は20を下らないがその中でも松見の滝が最も大きい。行ってみよう。案内する。」ぜひ見たいと案内をお願いした。鳶温泉泊

41 【9日目:明治41年9月3日】
猿橋

奥入瀬川も鳶川と合流してからは普通の川となる。ここには猿橋という危機がある。斜めに生えた大木を利用して、その木の半ばごろから丸太を後岸(向こう側の岸)にかけて渡してある。その木によび登って丸太を渡るものである。一種奇妙な橋だが、手の握まる木もあり、鎖綱もありそれほど危険なことではない。

40 【9日目:明治41年9月3日】
石ヶ戸

川畔(かわべり)に大きな石が自然と屋(おく)になり十数人はいれるところがある。太田氏「ここは鬼神のお松が潜んでいたところ」という。

39 【9日目:明治41年9月3日】
奥入瀬深流 白布瀑(現在の白布の滝)、白絲瀑(現在の白糸の滝) 姉妹瀑(現在の姉妹の滝)、雲井瀑(現在の雲井の滝) 樹瀑(現在の九段の滝)

途中、鳶温泉より迎えに来た小笠原直吉氏、太田吉司氏に逢う。湖口から鳶川を入れるまでおよそ約12km。島が多くみえな立っている。若者が水中にも多くありそれに木がある。これが奥入瀬深流の特色である。深流は普通勾配が急で、水の増減が激しく、川中の岩に木が無いことが多い。奥入瀬はほとんど勾配がないくらい流れが緩やか。十和田の山全体に樹が茂っているため、洪水がなくて老樹が天を覆っている。しかし、時に激しい急流もあり単調ではない。下にはこみが茂り、紫陽花や蛇麻の花も咲いている。いかなる凶災でもここを上り下りするものは夏を知らない。左右は断崖で滝がかかる。白布の滝を最も美観とする。白糸の滝、姉妹の滝、雲井の滝、九段の滝。名前があるものもあるが未だ名づかないものも多い。高さはいつも約30mもある。木が茂っているために湖口が見えないものや下が見えないものもあって奥ゆかしく感じられる。十和田湖に遊び、この深流を見ないものは、十和田湖を見たというべからず。

38 【9日目:明治41年9月3日】
子ノ口の滝(現在の銚子大滝)

約1.4kmにして銚子大滝に至る。高さ約9m、幅約30m。三里四方の十和田湖の水が集まって落ちるので水量が多い。幅が広いだけならほかにその類は少なくない。ことにナイガラの写真を見た目には十分満足しない。しかしこの深流は他にも見ごたえのある風数がある。

37 【9日目:明治41年9月3日】
子ノ口

湖水が川となり流れ出るところを子ノ口という。この流れを奥入瀬川という。橋が架かる。長さ13、4間(24～25m) 右の岸を下ると路も緩やか。※上流から下流に向かって、右側を右岸、左側を左岸という慣習。

12 【6日目:明治41年8月31日】
東湖

十和田湖は四面山に囲まれている。銀山、鉛山西に在り。東にあって最も高いのは十和田山。南にあって最も高いのは前山。北にあって最も高いのは御鼻部山。大日本地図によると湖面は海拔450m、御鼻部山は976m(※現在はそれぞれ海拔400m、1011mと確認されている)。湖は最も広くて、岸の出入りもなくほとんど半円形。東西およそ12km。南は3つの大きな湾となっていて、東湖、中湖、西湖。大きさはほぼ同じ。宇樽部は東湖の南浜にある。左に御倉半島の端にそびえる御倉山を臨み、右に十和田山を臨み、前に御鼻部山を臨む。御鼻部山の右に2峰首が首を出している。西を東鞍岳、東を赤倉岳という。四周の山はすべて国有。樹木が盛んに茂ることは他に見られなく、みな落葉樹。晩秋になると紅葉が碧い湖を囲む。この湖の大きさは、中禅寺湖の3倍以上あり、道は湖を囲むように通っている。沿岸の長さはおよそ60kmに達する。

19 【6日目:明治41年8月31日】
御倉山

私は中湖の東岸では最も御倉山を好む。

15 【6日目:明治41年8月31日】
御倉(おむら)

洞穴を見る。御倉という。中は2つに分かれていて奥行きはいずれも数百メートル。

10 【4日目:明治41年8月29日】
十和田湖湖畔・宇樽部 三浦泉八氏宅

午後10時、三浦泉八(道太郎の父)の家に到着。道太郎の父、泉八は、明治16、7年頃、初めて五戸から宇樽部の道を開く。船を造って小坂監山の貨物運搬を請け負い、宇樽部を開墾した人物。宇樽部は人家24、5軒。水田、陸田あり。農民は耕作のほか、湖での漁、山での猟で暮らす。泉八は山上の一王者といふべきか。ここは俗世間から離れた別天地。盜賊の心配がないので雨戸を閉める必要がない。今も雨戸を閉めない生活があることに驚いた。三浦泉八氏宅泊

33 【7日目:明治41年9月1日】
宇樽部 三浦泉八氏宅

夕暮れ時三浦氏宅に戻る。江渡氏と春汀兄弟は山を下りる。(鳶温泉へ) 三浦泉八氏宅泊

36 【9日目:明治41年9月3日】
宇樽部

三浦氏宅4泊、織田氏宅1泊。あわせて5泊の滞在で十和田湖を去る。百穂、桂月、三浦道太郎氏、一雄氏父子、4人 プラス、荷物運搬の男1人 計5人 宇樽部三浦泉八氏宅を出発。

17 【6日目:明治41年8月31日】
千本松(せんぼんまつ)

姫小松のある林の畔を千本松という

22 【6日目:明治41年8月31日】
千本松

千本松に着いた時、日暮旗を掲げた船が来た。休屋の人たちが歓迎の宴に招こうと迎えに来た。

21 【6日目:明治41年8月31日】
古い場 霊山十和田

十和田神社にお参りする人は、古い場に米を投じて祈禱するといふ。祭日には、白気がこの山にあがると言い伝えられる。ただ眺めているだけでも十和田湖畔は唯一の霊山である。

16 【6日目:明治41年8月31日】
岬小刺岩

刺のような小さな石がそそり立つ